

高知県

田村西見当遺跡(B,C区)の発掘

岡本健児
広田典夫

×印が遺跡の位置。南国市田村

西見當に遺跡は所在する。

南国市教育委員会刊

昭和51年3月31日

1:50,000

1000m 0 1000 2000 3000

序文

土佐の心のふるさと南国市は昔から土佐の政治、文化の発祥地として栄え、弥生遺跡や古墳等が各地に散在しております。

「田村西見当遺跡」の発見は昭和30年、前浜の浜田春水翁によってなされ、当時一部発掘調査の結果「弥生前期中葉」の楕円形の貯蔵穴とそれをとりまく周溝の一部及び土器類が発見されました。

以来19年経過した昭和49年の冬、西見当遺跡の近くで小学生が偶然にも全国的に4例しかない「銅鐸の舌」と県下で最初の「磨製石鎌」を発見しました。この付近は近い将来ビニールハウス建設予定の地で、緊急調査の必要にせまられ、高知女子大学岡本健児教授、高知ろう学校広田典夫教諭らの協力を得て、国・県費補助事業として発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、弥生前期前半に掘られたとみられる弧状の「環溝」にとり囲まれて、工作跡や貯蔵穴が発見され貯蔵穴からは従来の出土品よりも古いとみられる弥生前期前半の土器群が出土し、又「炭化物」が多く発見されました。

のことにより田村西見当は物部川デルタ地帯における先住民族の遺した弥生前期の住居跡であることが確認されました。今後再び発掘の機会を得て、環溝の全てを知り、先住民族の生活様式を明確に致したいと存じます。

おわりにのぞみ、岡本健児、広田典夫先生の全面的なご協力により、この調査報告書が刊行できることに深甚の感謝を申しあげ、埋蔵文化財に対する認識の高揚の一助にでもなれば幸と存じます。

昭和51年3月30日

南国市教育長 門田真一

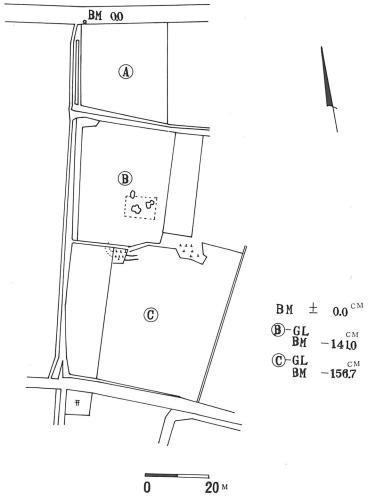


2. 西見当遺跡付近図 (A, B, C, は地区を示す)

にしけんとう 田村西見当遺跡の調査

昭和51年の2月中旬から下旬にかけて、高知県南国市田村西見当遺跡の発掘調査を実施した。西見当遺跡の発見は、昭和30年に南国市前浜在住の濱田春水翁によってなされた。この発見の結果、高知県教育委員会はその年の12月に、この発見された遺跡を発掘した。この遺跡は西見当乙598~600番地（末松晋氏所有の水田）で、西見当遺跡A地区としている。この時の発掘で弥生前期中葉の楕円形の貯蔵穴（ $1.84 \times 1.45\text{m}$ 、深さ55cm）とそれを取り巻く周溝の1部が発見された。周溝の幅1.3m、深さ78cmで周溝から出土した土器も、貯蔵穴と同じ弥生前期中葉のものであった。これらの土器は発見の場所の地名をとって、西見当式土器と呼んだ。

(注) 岡本健児「高知県長岡郡西見当遺跡調査報告」(高知県文化財調査報告書第8集)



3. 西見当遺跡図



4. B, C 地区全景（人の立っている付近）



5. 銅鐸の舌

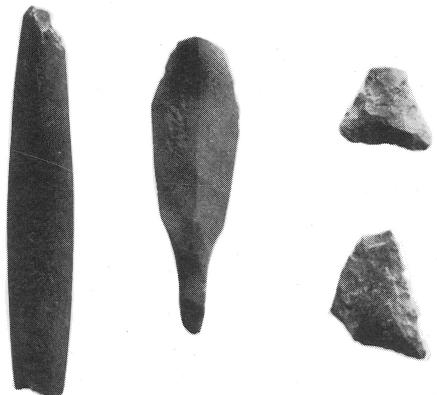
昭和49年の冬、西見当の一角にある墓地の近くで小学生が土掘りをしていて、ぐうぜんに多くの土器の破片の埋っているのに行き当り、それらの土器片のなかに銅鐸の舌1個が

含まれていることに筆者の1人岡本は知ることができた。この銅鐸の舌出土地は田村西見当乙579番地（佐竹久夫氏所有水田）であって、筆者らが西見当C地区と呼んでいるところである。

（注）岡本健児「銅鐸舌の新資料」（考古学ジャーナルNo.115）

また小学生は長さ11cmになると推定される磨製石鎌なども発見している。この磨製石鎌の出土地は、西見当乙581の4, 585の1, 585の2番地（岡本敬一氏所有水田）であって西見当B地区と呼ぶことにした。

今回の発掘は西見当遺跡B地区・C地区を限定して行った。とくに近い将来ビニール・ハウスが建てられると思われる地点を選んで調査した。



0 5 CM

6. 2号貯蔵穴出土の磨製石鎌と8号貯蔵穴出土の打製石鎌

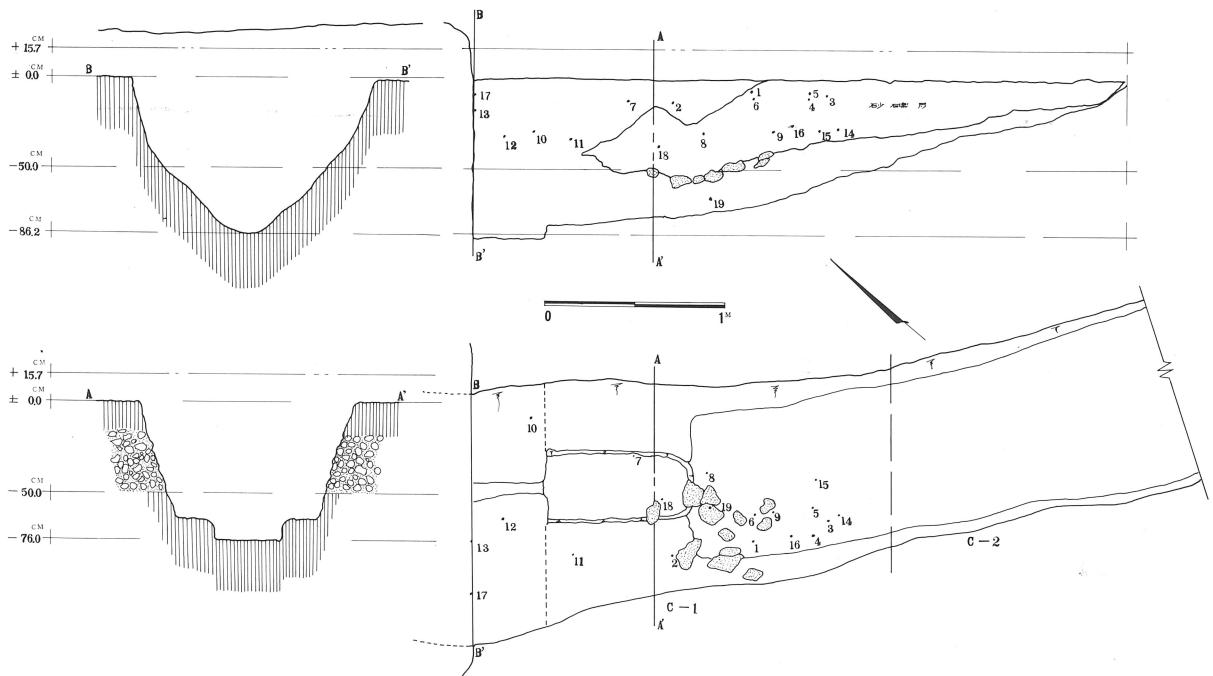
— C 地区 —



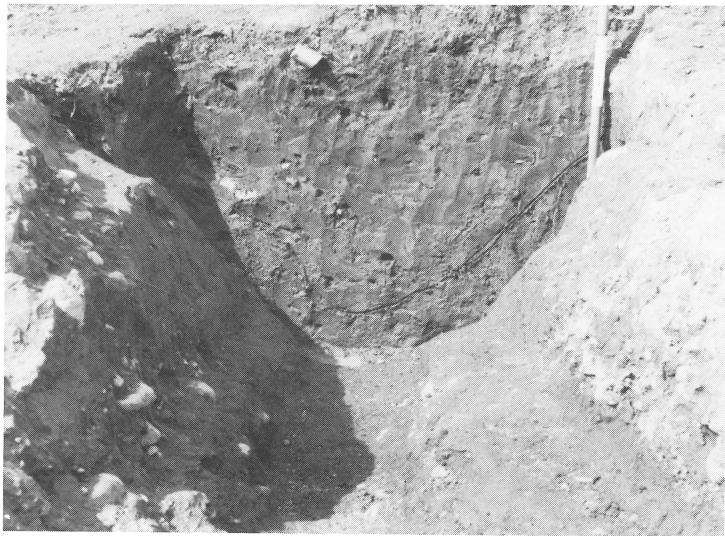
7. C地区の発掘開始
—10cm程度表土をはぐと帯状の黒い遺構が出現した。

C地区は約150平方mほど発掘した。その結果、C地区的遺跡はB地区に接する北部のみであつて、そのほとんど大半は遺跡でないことが判明した。またC地区的標高はB地区よりも、標高が15cm程度低いこと、しかも大雨の時には田村川の氾濫原になるらしく、砂礫層が厚く堆積している区

域がほとんどである。この砂礫層のみられないC地区西北部から、弥生時代の遺構がみられた。表土をはいだところ長く黒色の異ったところが遺構である。



8. C地区出土周溝（断面図、側面図、平面図）



9. V字状をなす環溝の断面とその東側の逆凸字状断面の環溝

C地区の表土をはがしたところで、黒く色の異った細長い遺構があったわけであるが、それを掘り上げることによって環溝の一部を発見することができた。発掘された環溝は、上部幅1.85m、深さ85cmでV字状の断面をしている。（第8図上の中）またC地区で発掘した環溝は長さ1.8mであって、墓地があって環溝がこれ以上掘れなくなつた部分の環溝は、先述したようにV字状をしていたのであるが、この溝が40

cm程東にいくと環溝の形態を変えてくるのである。すなわち40cmほどで環溝の幅がやや狭ばまり、V字状断面の溝は逆凸字形断面の溝になる。しかもV字状断面の溝の終った地点から、これも突然溝の底が9cmほど高くなる。しかも序々に底は東へ移る程高くなつてい



10. 環溝の断面とその末端部

る。溝の残っている末端で25cm程高くなっている。(第8図右下) なおV字形断面部から逆凸字形断面部に移行したところに近い溝の上部幅は1.17m, 深さ75cmである。

この環溝は墓地のため環溝が掘れなくなったところから、東へ5m程度溝がつづいていたと考えさせるよう、遺物が溝状の幅の状

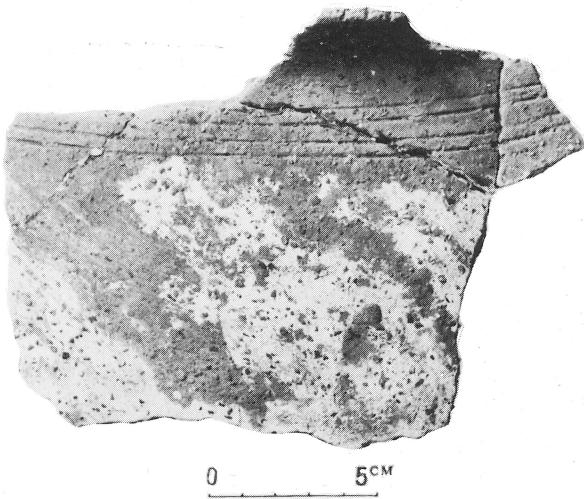
態で出土したし、溝状の遺構も不完全であったが残っていた。そしてその不完全な溝は序々に地表面に向って、その底をあげている。結局溝は墓地に接する部分から5m以上は延びていなかったと考えてよかろう。

(第8図右上) この5mより先は、弥生時代には田村川の氾濫原であり、低湿地であったとみられ、それに向って環溝の末端は開口したとみられる。ただこの場合、環溝末端の底部を開口部に向けて高くしているのは、多量の水が氾濫原より環溝へ侵入することを防ぐためであったとみられる。そしてこの部分の施設はかつてなにかあったのであろうが、その末端部が新しい時代の水田化のために、こわされたものとみられる。

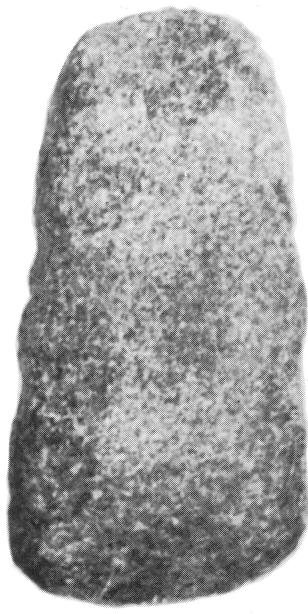


11. 環溝末端部出土の西見当II式土器壺形口縁部破片

この周溝は(地区にある墓地の下で急カーブして、B地区の南端に出て、B地区西部を通り、昭和30年に発掘したA地区の環溝につながり)、弧状の環溝を想定



12. 環溝内出土の大篠式土器壺形口縁部破片

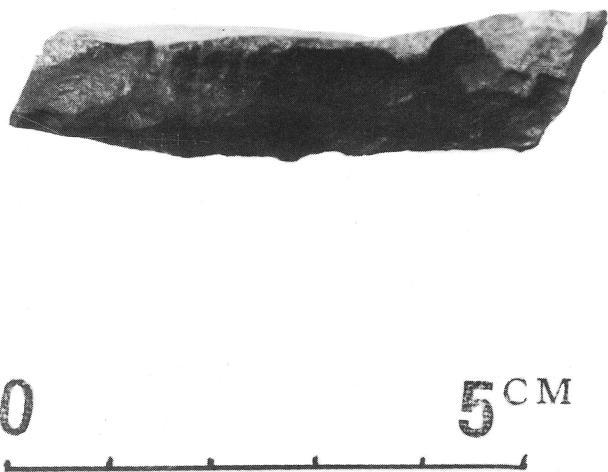


13. 周溝末端部出土の太形蛤刃石斧
—大篠式土器に伴うとみられる—

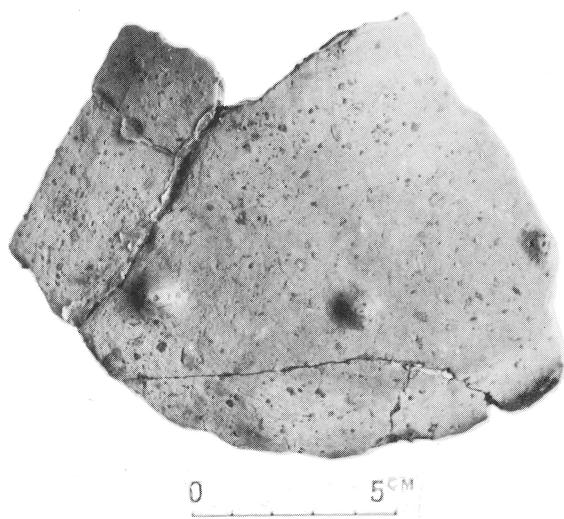
せしめる。この環溝に取り囲まれたなかに工房址や貯蔵穴があり、まだ未発見であるが住居址があるのであろう。この環溝の底部からは弥生前期前半の西見当 I 式土器が出土し、周溝の底部近くからやや上部にかけて（周溝の高さの中間位まで）、弥生前期中葉の西見当 II 式土器が出土する。よってこの環溝は弥生前期前半に掘られたものとみなしてよかろう。なお A 地区の環溝の一部と C 地区の環溝の一部がつながって弧状の環溝をなすと思われるが、この弧状環溝の弦部にあたる南北の長さは、67.5m 程である。

周溝は本質的には集落自衛のためのものとみてよいが、本遺跡の場合 C 地点における周溝末端の在り方から氾濫原の溢水を取り込み、この環溝を通して水田の灌漑に用いたことも考えられる。

問題の小学生が掘り出した銅鐸の舌は、発掘の結果環溝内から発見されたことに間違いないことになった。それも小学生の言によると地表下約30cmの深さから、そして墓地から約50cm程離れたところからだという。よって環溝上部より約15cmの深さであり、そして環溝の西部壁（墓地）、われわれの発掘で20cm程度掘り込んでいるので、第8図上部の周溝断面図の 7 の西北、そして 7 よりもやや深いところより出土したのではなかろうか。そして第8図下段の周溝平面図であると、逆凸字状の周溝底部を持つ部分の上位から出土したのであろう。なお舌出土層は、いわゆる周溝上部で西見当 II 式土器・大篠式土器（前期末）・田村式土器（中期初頭）・域式土器・北カリヤ式



14. 周溝内底部近くより出土したスクレバ一刀部
(出土層位から西見当 I 式土器に伴うとみられる)



15. 銅鐸舌出土地点近くから出土した城式土器壺形
破片—胴部に乳状突起がある

(中期中葉)・龍河洞 I 式(中期末)・ヒビノキ I 式(後期前半)の土器が混在して発見されているので、この舌がどの型式の弥生土器と伴ったかは断言できない。ただこの舌出土地付近の環溝上部の遺物類の埋没の状況から、弥生中期中葉から後期初頭にかけて、この環溝はまだ完全に埋没していないで、それこそ深さ30~40 cmの多少の凹地として残っていたとみられ、しかも舌出土地点は環溝東部に拡がる氾濫原の砂礫層の末端にあたり、いわば湧水地であった可能性が多分にある。そしてこの湧水地にこの舌が埋没された可能性もあり、この舌が湧水との深いつながりがあるようと考えられて仕方がない。

第8図によるC-1区周溝内出土の遺物について番号順に紹介しておこう。

1 扁平敲石・2 小型扁平敲石・3 西見当 II 式土器壺形破片・4 城式土器壺形破片・5 チャート石核・6 チャート石核・7 扁平敲石・8 大篠式土器片・9 砥石破片・10 西見当 II 式壺形破片・11 土器底部・12 チャート製投弾(第16図)および西見当 II 式土器壺形・13 西見当 II 式壺形口縁・14 土器底部・15 砥石(第17図)・16 打割石

庖丁様石器・17 打割石庖丁様石器・18 土器底部・19 四石

以上の諸遺物のうちチャート製投弾と砥石を図示して紹介しておこう。

チャート製投弾



16. 投弾（チャートで製作している）

径は4.4cmである。大きい投弾は西見当I式土器に伴うものであり、周溝出土のやや小さいものは西見当II式土器に伴うものであろう。帶状の投てき具にはさみ、ふりまわして速度をあたえ投げる狩猟具であり、戦闘用の武器であったろう。

今回の発掘では3個出土し、周溝内より1個、後述するが8号貯蔵穴（pit 8）から2個出土している。8号貯蔵穴出土の2個は、やや大きく5~5.9cm大で、完全な円形でなく両端あるいは四面に方形の面がある。

周溝内のものはやや小さく

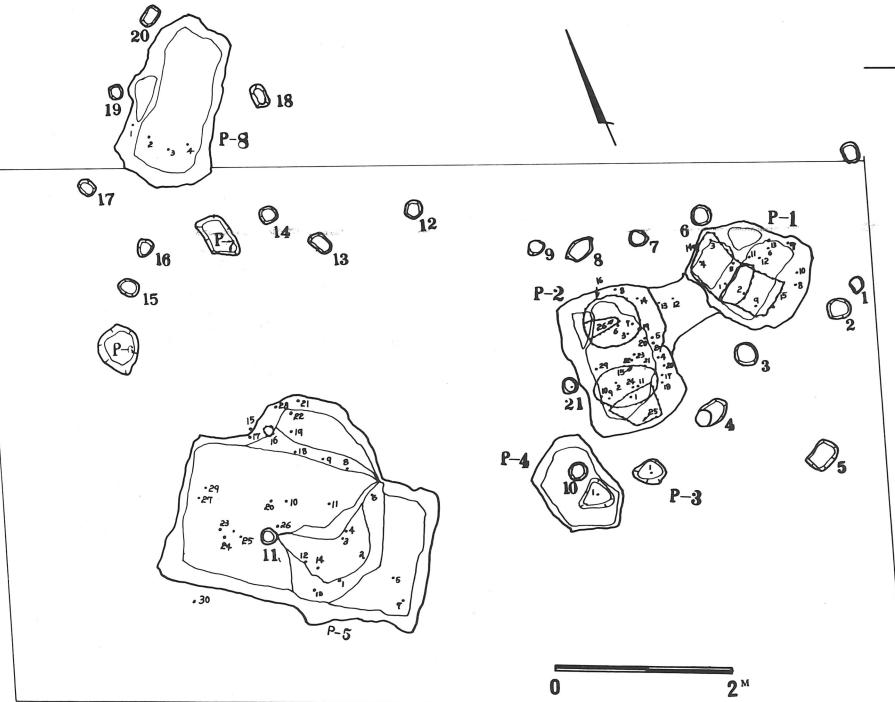
砥石



17. 砥石（すべてが周溝より出土したもの）

発掘では12個の砥石が発見されている。そのうち8個はすべて周溝内より発見され、残り3個は2号貯蔵穴（pit 2）より、そして1個は工房址の床面より出土している。荒砥に使用する砂岩製、仕上砥とみられる粘板岩製がある。割れた小形のものが多い。この他に軽石製の砥石があるが、これは後述する。

B地区



18. B地区出土遺構群と遺物出土地点

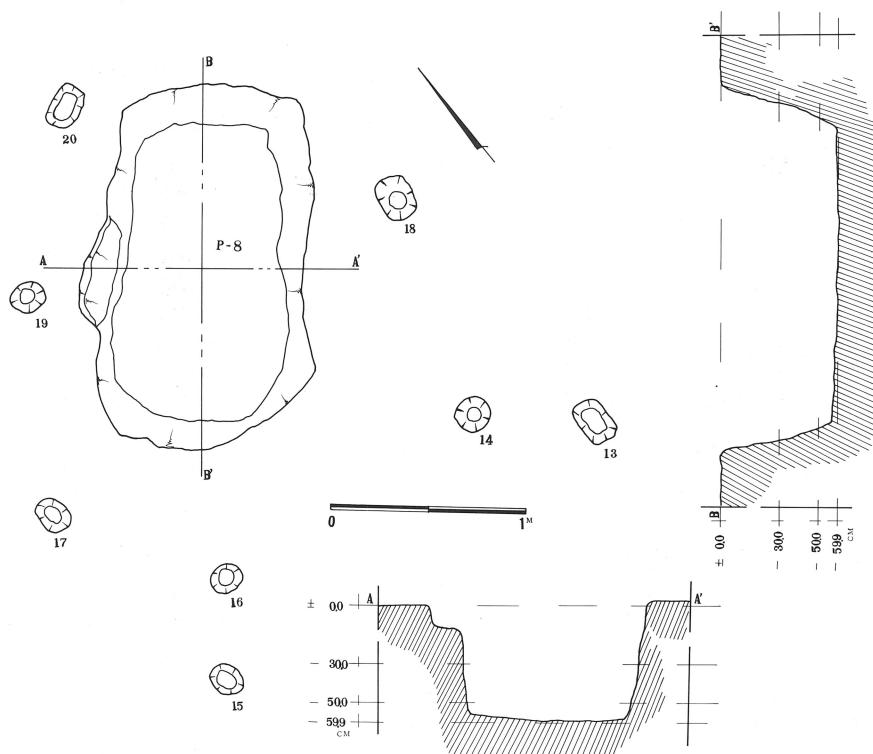


19. B地区で表土をはぐと遺構のあるところだけ
黒い土がみられた

には、いくつかの柱穴とみられるものが発見されている。B地区での発掘の成果は、これらの遺構の発見と、従来西見当式土器と称していた弥生土器よりも、さらに一型式古いとみられる前期前半の土器群が、2号・8号の貯蔵穴を中心に発見されたことである。

B地区の発掘は62平方mほど発掘した。ビニール・ハウス建設予定地を選んで20×30mの区画に、そしてそれに連接していた1m×2mの長方形の8号貯蔵穴(pit 8)を発掘した。B地区より発見された遺構は、長方形の2つの貯蔵穴(2号貯蔵穴=pit 2・8号貯蔵穴=pit 8)と浅い橢円形状の貯蔵穴1(4号貯蔵穴=pit 4)，それにはほぼ中央に柱穴1本を持ち、炉址を持つ長方形の竪穴住居風の工房(pit 5)，さらに2号貯蔵穴に連結し貯蔵穴風に掘り込んだ小工房址(pit 1)，さらに土器などを埋めこんだと思われる小ピット4個(pit 3・pit 4・pit 6・pit 7)そして小工房址・2号貯蔵穴・8号貯蔵穴の周辺

8号貯蔵穴



20. 8号貯蔵穴実測図



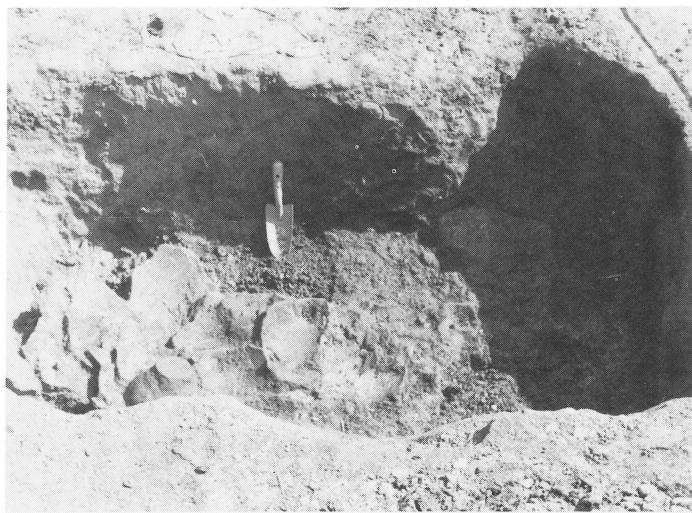
21. 蓋形土器（8号貯蔵穴出土—西見当I式土器）

8号貯蔵穴は2m × 1mの長方形をなし、深さ59.9cmのピットである。西南部の一角に10cm程掘り込んだ段状部がこしらえてあり、あるいはここが穴に入出す時の足がかりかも知れない。プランは長方形と言っても、正確には隅丸方形であり、底部は平坦であるが側面は舟底形

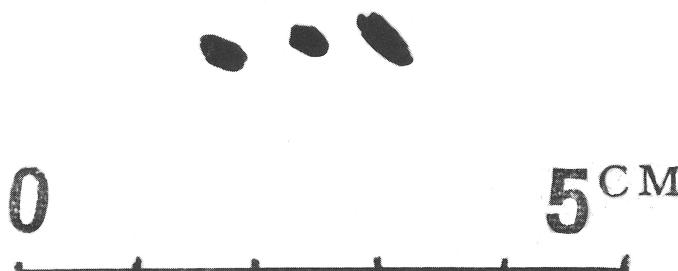
のように傾斜している。周辺には径10~20cm大の柱穴が、この貯蔵穴を取り囲むようにあるところから、屋根があったとみる方が正しかろう。

第18図に図示してある遺物出土地点は、4個所であるが、1は蓋形土器（深さ-47cm）・2投弾（-39.2cm）・3鉢形土器（-44.3cm）・4投弾（-44.7cm）である。投弾については先述したが1の蓋形・3の鉢形はほぼ完形品で、ともに従来の西見当式土器（以後これを西見当II式土器と呼ぶ）よりも古い西見当I式土器における蓋形土器・鉢形土器である。

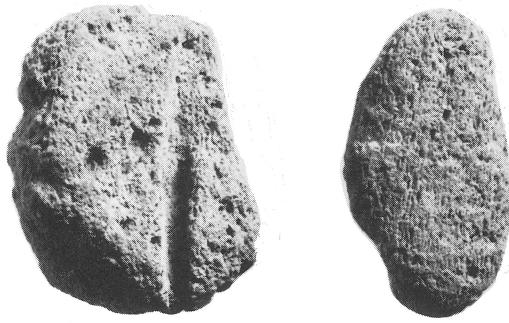
この貯蔵穴からは、貯蔵穴が焼けたためか炭化物の混入があったので、フルイにかけて精査



22. 8号貯蔵穴と土器出土状況



23. 8号貯蔵穴出土の炭化米



24. 軽石製砥石
(左は8号貯蔵穴より出土、右は2号
貯蔵穴より出土した)

した結果、鳥獸骨片がみられこれを金子浩昌氏に送付し鑑定の結果、次のような報告を受けた。

「鳥類」

○カモ類 種類は標本が焼けているために、全体に小さくなっていることが予想され、そのままの大きさでは判別しかねます。標本には鳥口骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、脛骨、中足骨、趾骨がみられますか、椎骨・寛骨などはないようです。ですから、羽や足の部分のみとなります。個体数は、上記の骨が左右3個ずつの場合があり、3個体分はあったと思われます。

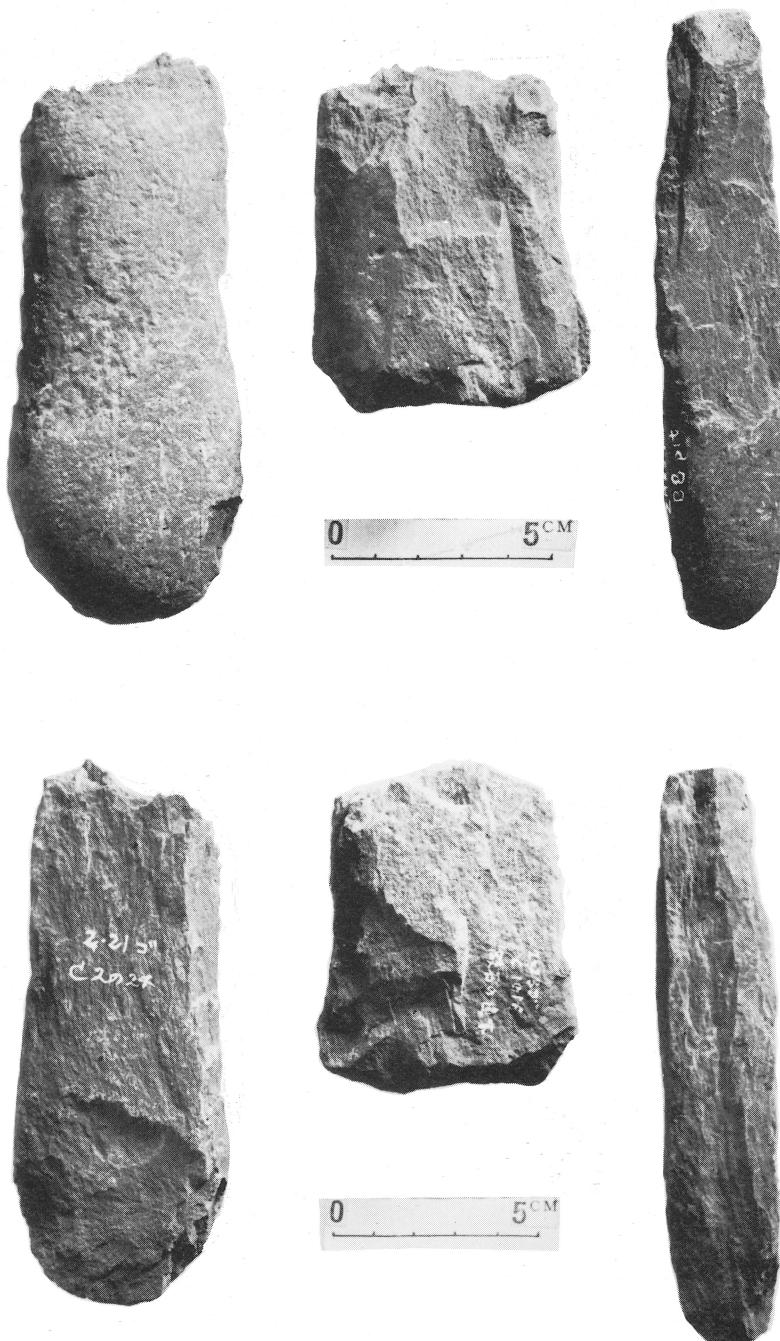
○カモ類と別の一種がありそうですが、はっきりしません。

魚類

ごく小さい椎骨（フナかも知れません。不確かです。）背鰭棘（これはやや大きいもの小片5個

獸骨

シカ・イノシシなどの大きなものの小片5個



25. 西見当 I式土器に伴う石斧類（入田出土の石斧の伝統がみられる）
上は表、下はその裏面である。右は 8号貯蔵穴、中は 1号小工作址
左は 2号貯蔵穴から出土した。

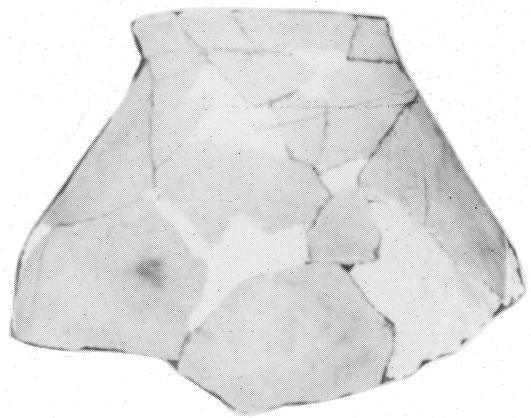
結論としてとくに鳥の骨が、こんなにまとまっていたのは大変面白いと思います。」

なおごくわずかであったが炭化米も発見されている。
(第23図)

8号貯蔵穴より出土した石器は、打製石鎌（粘板岩製・平基無茎式と凹基無茎式）2本・軽石製砥石1(幅1cm, 深さ0.7cmの溝状の砥いだ痕あり)・扁平敲石3個（砂岩製）・柱状片刃石斧（打製・粘板岩製）・投弾（チャート製）2個であり、それにチャート剥片8・粘板岩剥片14・砂岩剥片3がある。また本貯蔵穴より出土した土器群は、ほとんどが南四国中央部より西部にかけての地域における最古の弥生土器西見当 I式土器である。そして貯蔵穴の上部、それも層的に薄く大篠式土器・田村式土器・城式土器が破片でごくわずか



26. 西見当 I 式土器甕形—入田 B 式土器の伝統が強く、口縁下、胴部にかすかな突帯、列点文がある。8号貯蔵穴出土。



27. 8号貯蔵穴出土の大形壺形土器の口縁より胴部まで (西見当 I 式土器)



28. 8号貯蔵穴出土の甌 (西見当 I 式土器)

発見されている。

8号貯蔵穴の西見当 I 式は、底部の数量と出土土器完形品等の考慮して検討した結果、19個の土器が入れられていたことになる。器形別にみると、甕形 7・壺形 8・鉢形 3・蓋形 1 になる。うち甕形は晩期繩文系の入田 B 式土器の甕形から変化して、前期前半の甕形土器に移ろうとするもの（第26図）。口縁が弱い波状口縁を持つ甕形などまだ繩文的色彩の強いものもあるが、他の 5 個の甕形土器は口縁に列点文を持ち、口頸が如意形をなし胴部のすぼまる形式のものである。すべてが口縁下に全く籠描沈線文を持たないところに特色がある。壺形は大形の壺形土器 2 個、普通の壺形が 6 個出土しているが、大形壺形土器はともに下胴部以下を欠いたのか、また片面しかしない不完全なものであって、これは意識的に割って貯蔵穴底部に敷きつめたような状況で出土している。なお甕形土器の 1 個は甌である。（第28図）



29. 8号貯蔵穴出土の鉢形土器
(西見当I式土器)

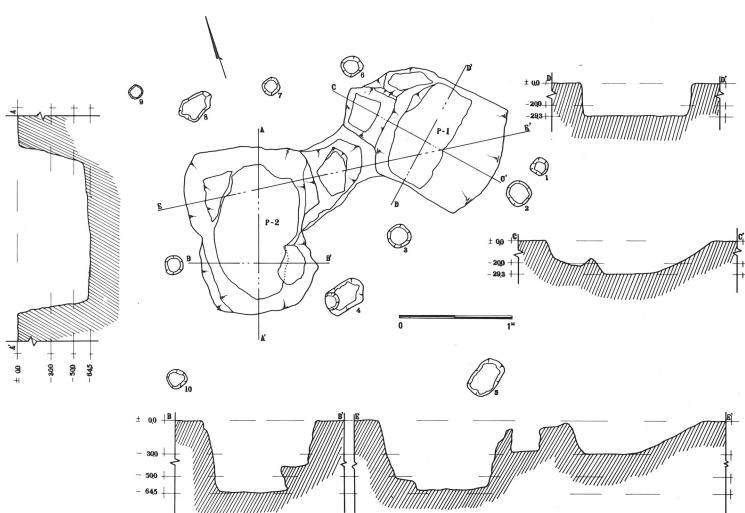


30. 8号貯蔵穴出土の鉢形土器
(西見当式土器)

普通の壺形は5個出土しているが、口縁下だけ複合で厚く作り、胴部に有段部を持ち、全く無文のものから、横平行線だけのもの、あるいは縦平行線のあるもの、さらにそれらに上弦の重弧文のみられるものもある。鉢形は口縁の如意形に外反したもの1個（第29図）、口縁の直口したもの2個が出土している。（第30図）蓋形は先に図示した縄文系の伝統を持つ甕形土器の口縁に、かっちりとのるのでこの甕形の蓋としたものと思われる。

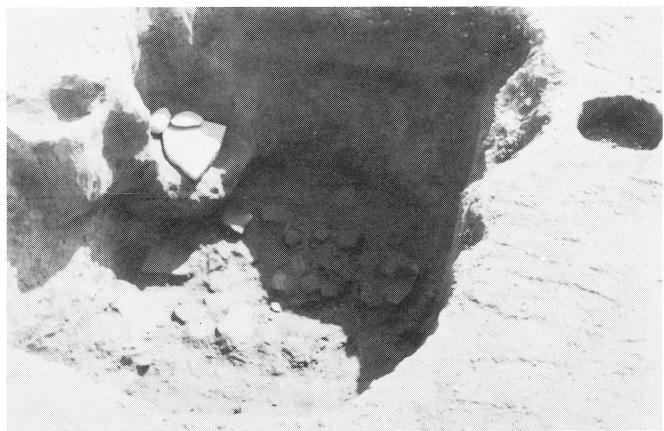
第22図は8号貯蔵穴であって、土器の出土状況を示すものである。

2号貯蔵穴



31. 1号工作址と2号貯蔵穴の実測図

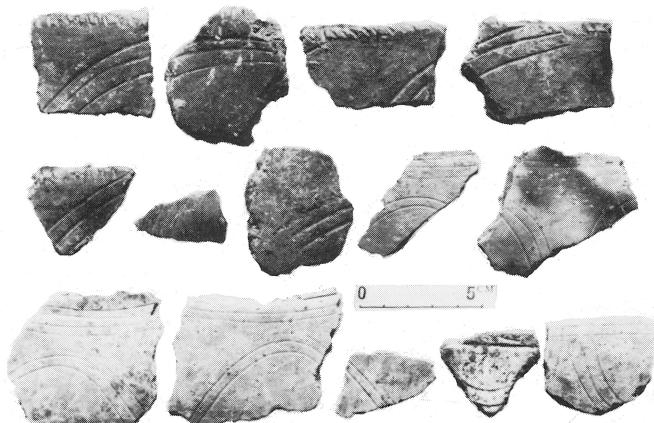
2号貯蔵穴は8号貯蔵穴と形態が似かよっていて、長方形をなしていないがやや8号貯蔵穴にくらべると小形である。縦横1.5m×1mで、深さ64.5cmである。深さは8号よりも深い。この貯蔵穴も西北部の一角と東南部の一角に、貯蔵穴の底部より高くした掘り込みがあり、これも穴に出入する時の足がかりとも考えられる。ただ東南部の足がかりと考えら



32. 2号貯蔵穴と遺物出土状況



33. 平前より1号小工作址、2号貯蔵穴、遠方は工房址とみられる竪穴



34. 2号貯蔵穴より出土した重弧文のある壺形土器片（西見当I式土器）

れた部分には、第32図にみる如く、これに敲打用の台石と敲石がのせてあった。また2号貯蔵穴とこれにつづく小工房址（ピット1）とは、周辺に10個所に近い柱穴が取開んでいるので、これらの小工房址と2号貯蔵穴は一つ屋根の下にあったと考えてよかろう。（第33図）

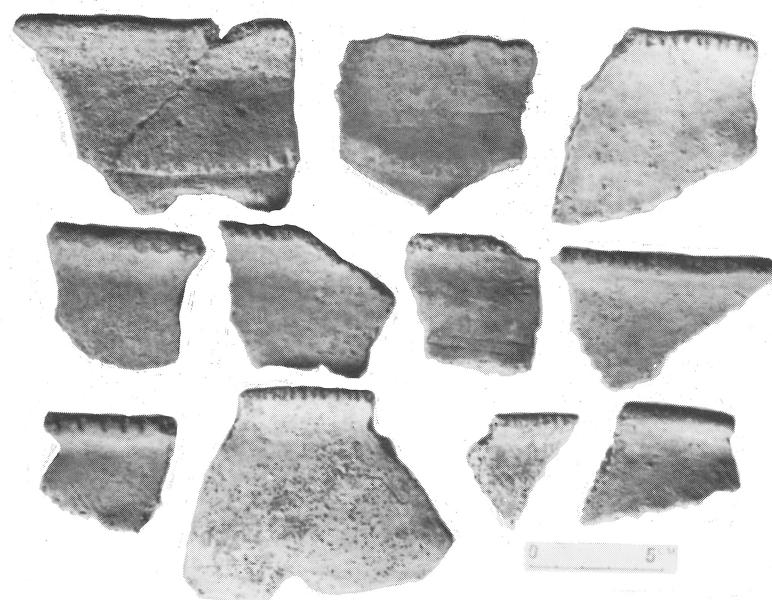
第18図に図示した2号貯蔵穴の遺物出土地点に従って出土遺物を紹介しよう。

1 西見当II式土器片，2 大篠式土器壺形口縁，3 襟形口縁，4 襟形口縁，5 壺有段部，6 大篠式土器壺形，7 砥石，8 重弧文土器片，9 石器剝片・壺形有文部，11 襟形口縁，12 石器剝片，13 口縁に有段部のある襟形土器口縁，14 壺形口縁部，15 壺形口縁部，16 壺形口縁部，17 砥石，18 鉢形土器片，19 磨製石鎌，20 襟形土器底部，21 敲石，22 打製石鎌，23 壺形有文土器，24 蛇紋岩の磨石，25 襟形土器完成形，26 襟形土器口縁，27 敲石，28 襟形口縁，29 壺形有文破片（型式名のないものは西見当I式である。）なお2号貯蔵穴よりは28個体分の土器底部が発見されているので、それだけの数に近い土器がこの貯蔵穴に入れられていたとみてよかろう。そして28個体の底部のうち丹彩したものが1個、粒痕のあるものが1個あった。

2号貯蔵穴の上部よりは、大篠式土器片と

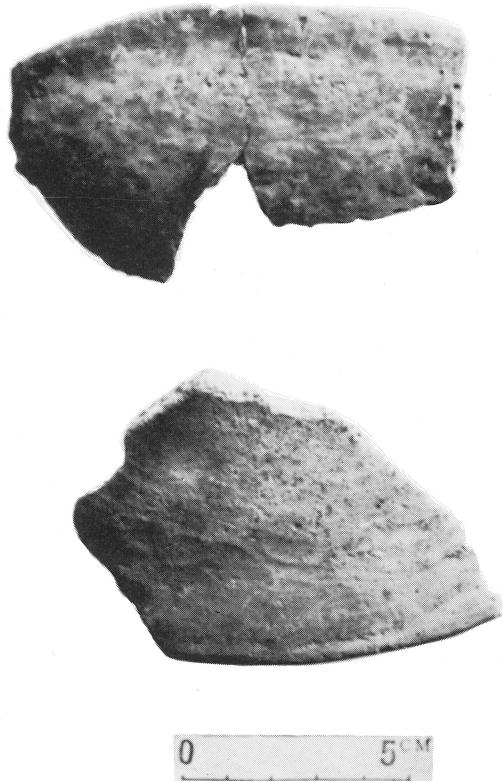


35. 扁平敲石（打割した剝片の周辺を敲いている）中央の1個（1号小工作址）以外は2号貯蔵穴より出土。西見当I式に伴う。



36. 2号貯蔵穴出土の西見当I式土器の壺形口縁（北九州の板付II A式土器の壺形に近似する）

西見当II式土器片が數片出土しただけで、他はすべて西見当I式土器である。そして8号貯蔵穴と比較して注目すべき点は、8号が壺形が多かった対し、2号は壺形が多い点である。2号貯蔵穴の西見当I式土器の壺形は、口縁の外反はやや強く美しい如意形を示す。そして口縁端には列点文を持ち、また上胴部にも列点文を持つ。その上胴部の列点文より下は一段外面が低くなる。このいわば有段部付近が土器作製時の接合部らしく、その内外面に指頭圧痕を持っている。この種の土器は入田B式土器の壺形土器から変化したもので、その伝統の強いものである。北九州の板付II A式土器には、これに



37. 2号貯蔵穴出土の鉢形土器（上）と蓋形土器（下）の破片
鉢形は浅く、波状口縁を持ち、研磨され、いわば入田B式
土器に入れてよいものである。蓋形は西見当I式土器。



38. 打製石鏃
上段、1号小工作址出土。二段目、2号
貯蔵穴出土。三段目、周溝出土。下段、
表面採集。

該当するものがある。壺形土器は8号のものと余り変化がないが、とくに下弦の重弧文が多くみられ、格子目文もみられる。2号貯蔵穴の底部近くから出土した一個体分の割れた浅鉢形土器は、深く注目してよからう。それは器形において弥生の鉢形土器の器形をとらず、口縁部はゆるやかな波状口縁を持ち、内外面とも黒褐色をなし研磨され、いわゆる繩文晩期の黒色磨研土器の系統を引くもので、入田B式土器のなかに入れてもよいものであり、前代の土器が残存して新しい型式の土器とともに使われていたものと考えてよからう。

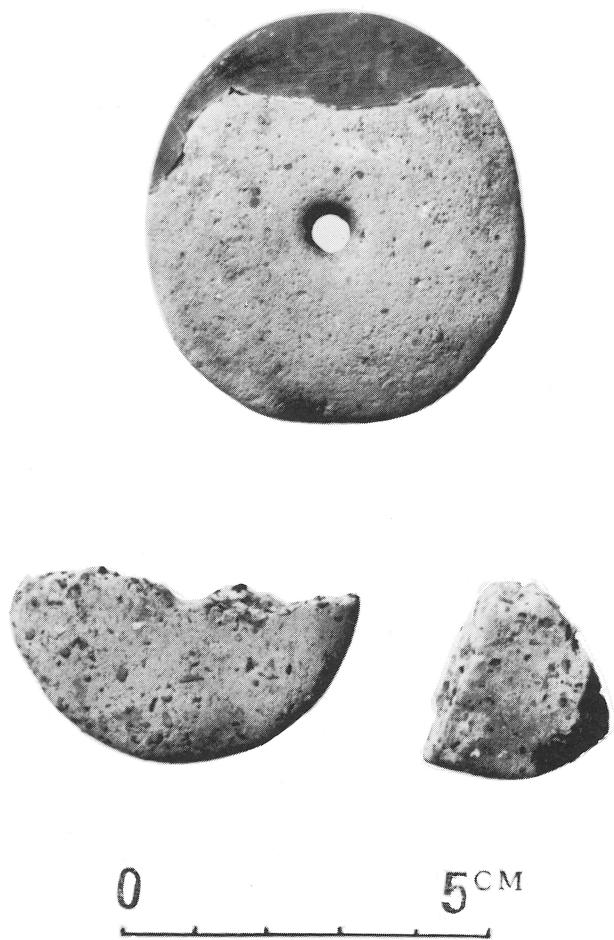
第18図をみていただくと、2号貯蔵穴に接近して浅いピットである3と4の小さな貯蔵穴がみられる。これは浅く深さ30cm程度で、それぞれ土器片が一片ずつ出土しているが、ともに西見当II式土器のものとみられる。ピット4のなかには西見当I式土器の時期の柱穴10と重なっている。

1号小工作址（ピット1）

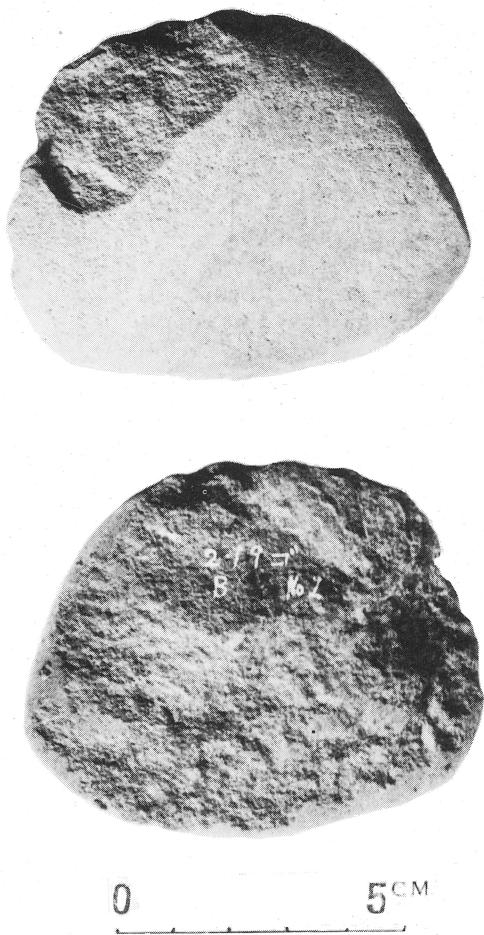
2号貯蔵穴と連結して、ピット1である小工房址がある。この貯蔵穴と小工房址の連結部には、深さ20cm、上部は不整形が40×25cm大の小ピットである。この連結部より出土したもののは、2号貯蔵穴の出土番号の12・13・14である。

この連結部の東部に縦の断面（C-C'）が舟底形をした浅いピットが見つかっている。しかもこのピットは、完全な舟底形でなくその西北部に傾斜を持った22×29cmの四角い小さな穴を持ち、大きなピットとの間に小さな高さ10cmの隆起を持つ。一見すると非常に

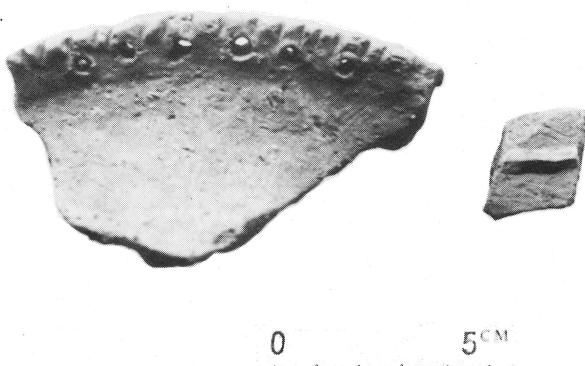
不思議な形をしたピットであるが、小さな四角い小さな穴は腰掛け用の穴であり、舟底用の穴は足を延ばして作業する工房であると考えられもする。またこの工房の東部に二本の柱穴があるが、そのうち第31図の2の柱穴は、機織の経巻から出た紐をかける杭の穴とみて、この小工房を機織りのためのピットと考えても大きな誤りはないと思う。ちなみに本ピットからではないが、周溝から2個、西見当B地区に接するカリヤ遺跡から39図に示すような紡錘車が出土し、糸を紡ぎ機織りが行われたことを示している。なおこの機織用の小工房と考えられる小ピットから出土した遺物は、第18図に従うと次のようになる。1 大篠式土器甕口縁、2 西見当I式口縁部および有文部および局部磨製刃器（石庖丁か）、3 壺口縁有段部（西見当I式）、4 粘板岩剥片、5 磨製石鎌未製品、6 大篠式甕・西見当II式壺（削り出し突帯あり）、7 チャート剥片、8 敲石、9 西見当I式口縁と底部、10 西見



39. 紡錘車
(上段表面採集、下段の二つは周溝より出土
したものである)



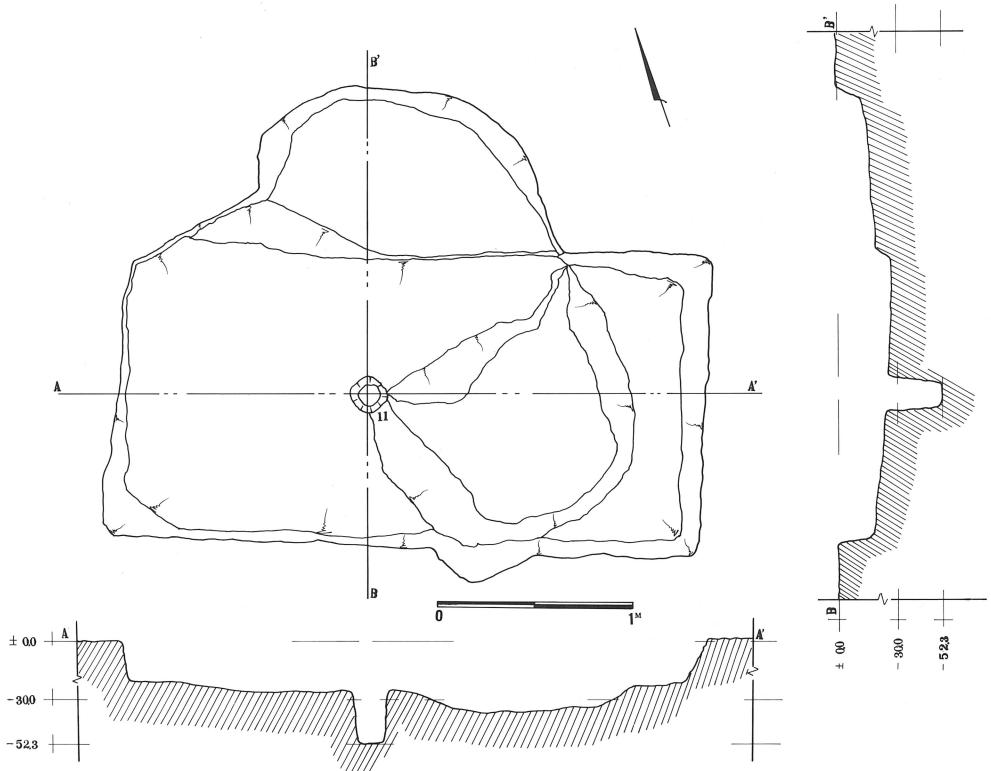
40. 小工房址出土の局部磨製刃器（石庖丁として使われたかも知れない）西見当 I 式土器に伴う。上は表、下はその裏面。



41. 貯蔵穴上部の時期的に新しい土器片（左は 8 号貯蔵穴上部より出土した大篠式土器。右は 2 号貯蔵穴上部より出土した城式土器）

当 I 式口縁, 11 西見当 I 式口縁（丹彩）, 12 小形打製石鎌, 13 西見当 I 式甕口縁, 14 西見当 I 式無文大形破片, 15 西見当 I 式無文土器片, 16 敲石

結局小工房址は発掘の結果、その上層は攪乱層で、中期末の神西式土器、前期末の大篠式土器それに前期中葉の西見当式 II 式土器片がみられ、工房址底部近くには西見当 I 式土器片がみられた。出土した遺物からみると、機織工房址でなく、むしろ石器製作址とも考えられるが、石器剥片の量がすくなくこれらは工房址埋没時の混入と考えたい。



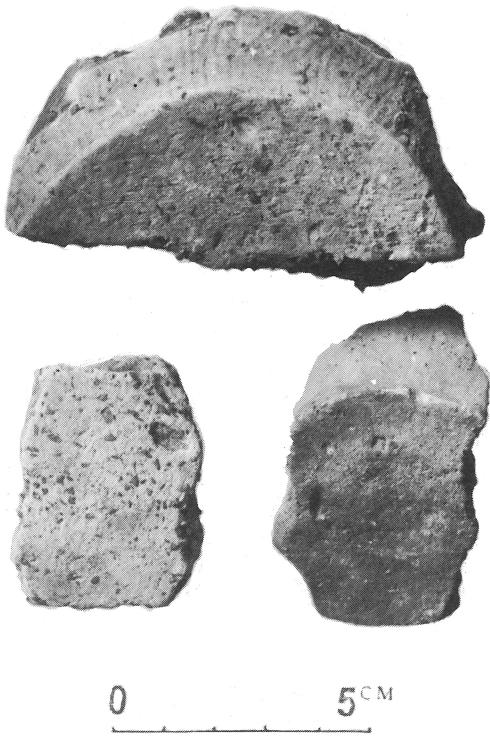
42. 工房址と考えられる竪穴

工房址とみられる竪穴

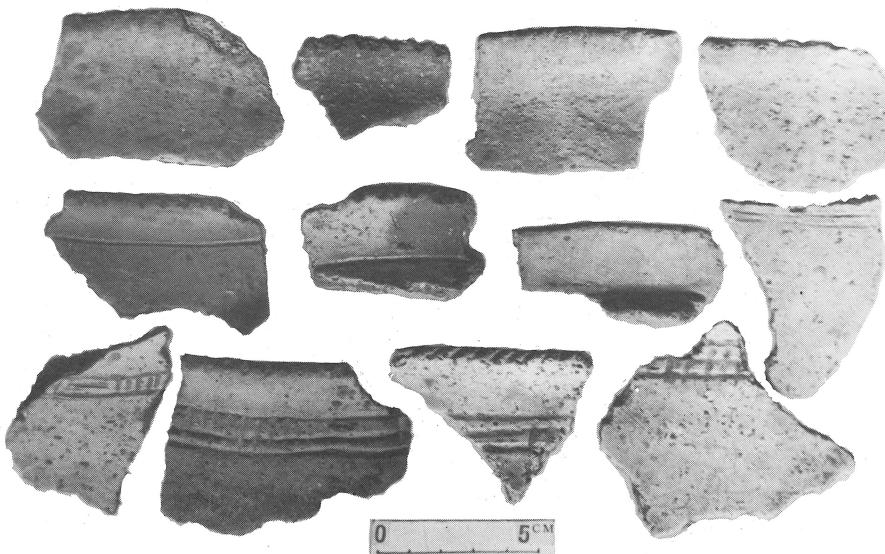


43. 工房址とみられる竪穴

表土をはいだ段階において、第19図にみる如く3つのピットの存在を思案せたが、発掘をすすめるうち、これがいわば小形の竪穴住居状のものであることが判明した。それは42図にみる如く $1.54 \times 3\text{ m}$ の長方形の竪穴であつて、それにその北側に出入口とみられる半径 0.9 m の半円形のついたものである。長方形の竪穴の部分は深く深さ 23 cm 程度、半円形の出入口はそれよりも一段あがって



44. 粋痕のある底部（上部は工房址出土のもの、下段は周溝より出土したもの）上部と下段左は西見当II式土器、下段右は大篠式土器の破片とみられる。



45. 工房址内発見の前期弥生式土器、すべてが西見当II式土器である。

深さ15cm程度である。長方形の豊穴の中央に、1本の柱穴があり、これ以外に柱穴らしきものは見当らなかった。長方形の豊穴の東部において広く凹んだ部分があるが、ここは炉址と考えられ、灰・木炭片それに床面が赤く焼けていた。この豊穴の広さ、それに炉の大きさ、さらに出土の遺物から考慮して、この豊穴は住居用として使用されずに工房用の豊穴としての使用を考えた方が正しかろう。この工房址から出土した主な遺物を、第18図の番号に従って列挙すると、1土器片、2土器片、3土器片、4大きな木炭片、5土器片、6土器片、7甕口縁、8甕口縁、9底部（穂痕あり）、9甕口縁、10粘土塊、11粘土塊、12敲石、13石斧、14粘土塊、15砥石、16局部磨製石庖丁、17土器片、18土器片、19土器口縁部破片、20壺形土器破片、21土器底部、22土器底部、23敲石、24甕口縁、25甕口縁、26投弾、27チャート剝片、28土器片、29石斧、30粘土塊

これらの出土遺物で注意すべきことがいくつかある。その第1は本豊穴内出土の土器片は、ほとんどが細片であって復元不可能のものが多く、さらに出土の土器型式が西見当II



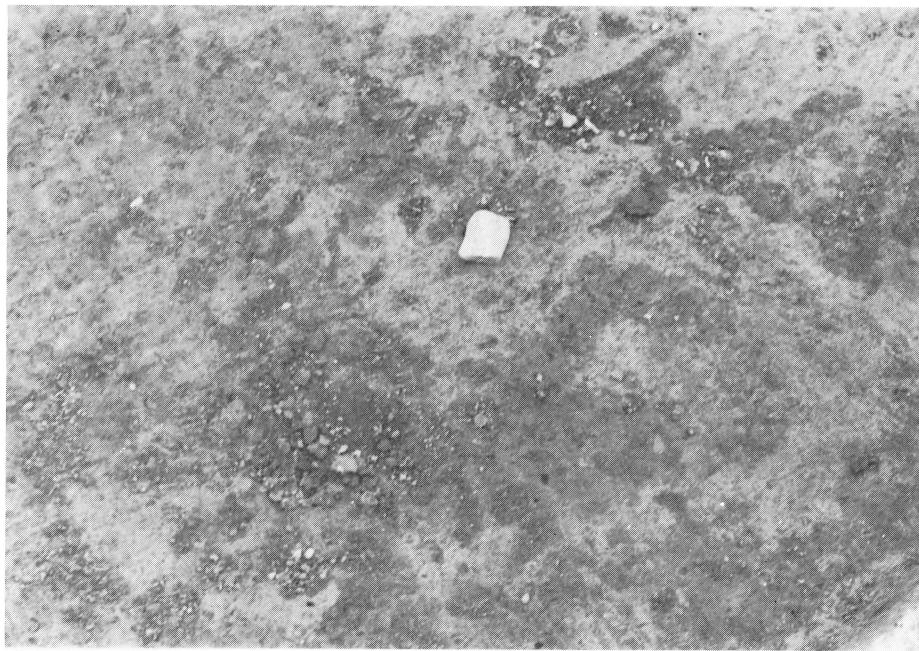
46. 工房址床面から発見された粘土塊



47. 工房址床面から発見されたチャート石核や剝片

式土器に限定され,
ほとんど西見当 I
式土器をみないこ
とである。よって
本竪穴一工房址の
作られた時期は西
見当 II 式土器の使
用された時期とみ
られる。第 2 に工
房からの出土品と
してとくに注目さ
れるのは、まだ焼
けてない粘土塊が
発見されているこ
とである。(46図)
これは土器製作時
—それも土器成形
時に使われた粘土
塊であって、この
粘土塊を割ってみ
ると全く火にあた
っていない純然た
る粘土である。こ
の粘土塊の出土に

よって、この竪穴たる工房によって土器製作が行われたであろうし、また砥石・敲石・投弾・
チャート剝片などの出土からも石器加工も行われ、さらに柱状片刃石斧や扁平片刃石斧の
出土から、木工具の加工も行われたとみられる。以上の諸点からこの小竪穴は住居址と考



48. 工房址床面よりの扁平片刃石斧出土状況

えずに、工房址専用の豊穴とみたのである。またそれがゆえに豊穴そのものも小さかったのである。

最後に B 地区全域は弥生前期後半の大築式土器使用の時期に、洪水による冠水があったのであろうか、今回発見されたどの貯蔵穴もまた工房も、その最上部に

厚さ 3 ~ 5 cm 程度の砂礫層がみられるそしてそれには大築式土器片が細片で発見されるのである。



0 5 CM

以上ごく簡潔に西見当 B・C 地区の発掘の概報を記した。この遺跡とその出土遺物については、とくに多くの問題点を含んでいて、きめられた日数と定められた報告書のページ数では述べきれないものが、実に多くある。これらについては、たとえば西見当 I 式土器の内容や入田 I 式土器との関係、あるいは入田 B 式土器との関係等さらに西見当 I 式土器に伴う石器の特種性などについては、適当な専門誌に詳説することを約したい。またその他の遺構などの問題については、近く刊行予定の「南国市史上巻」に述べるつもりである。

49. 工房址床面出土の柱状片刃石斧

発掘参加者名簿 (略敬称)

(参加者の皆さんに深謝申しあげます)

発掘担当者 岡本 健児 (高知女子大学教授)

〃 広田 典夫 (高知ろう学校教諭)

測量担当者 藤田威佳志 (南国市役所建設課技師)

大学生 角谷 和男, 岡本 桂典, 田中 幸一, 吉良 敬介

高知高専学生 中島南海男, 森口 初彦, 岩佐 賢司, 西内 公一, 佐竹 陽介
杉本 哲郎, 細美 守, 浅川 剛, 高田 浩

作業員 山岡 哲郎, 山岡由喜子, 池添 美栄, 岡本 芳美, 末政 芳子
末政須賀子, 山岡 梅意, 池添 耕造, 末政 晋, 山本 丑吉
三谷 勇喜 (市文化財審議委員)

地主協力者 岡本 敬一, 佐竹 久夫

地元協力者 三宮 寛, 久家 幸吉, 岡本 龍雄, 北岡 万弘, 末政 澄夫

市教育委員会職員 久家 豊一, 神田二三夫, 高木 正平, 田岡 正博, 武田 勝